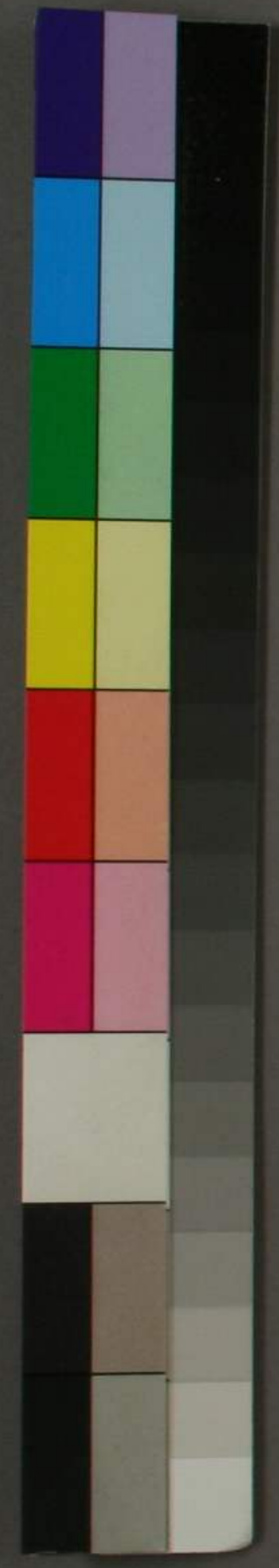


青山御流

活花手引種後篇四



多  
2848  
10-9



五

五

門ヲ多  
第2848  
10-9

雅

臺

春

卷之二

嘉永六年秋

日松園學人書





紫竹山茶

花器 華頂山什寶  
光格天皇御遺物白銀牡丹花黄金



嘉永四辛亥初春挿於  
華頂山小書院

攝津國浪速  
蕉雨亭秀月  
通稱 大信寺典澄

○ 活花手引

卷之四

大僧正顯道

君の世をしのぶの花は

志をりりしそ

あまのさかえゆへ

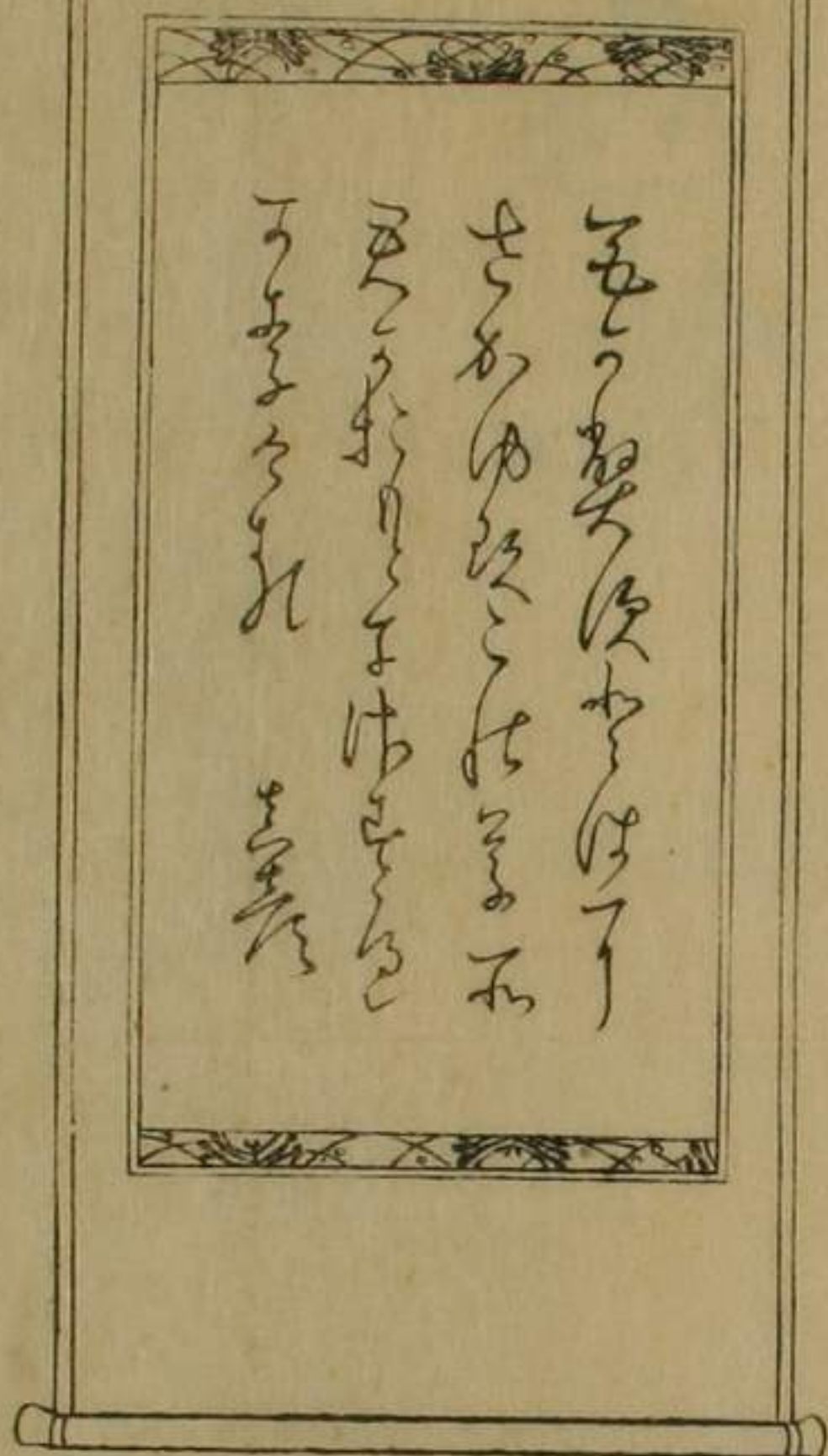
そよひあけをり

卷之四三

萬年青 二花 十七葉

船形鉢組留

丹後國岩瀧  
思燕齋 晒暖  
通稱 小室佐喜藏



玉峰 謹

一葉 五十一葉



互春齋 岩田英雅

嘉永元年戊申九月朔挿於  
洛東祇園社時幸之間

力々之根志すれふふふふふふふふふ

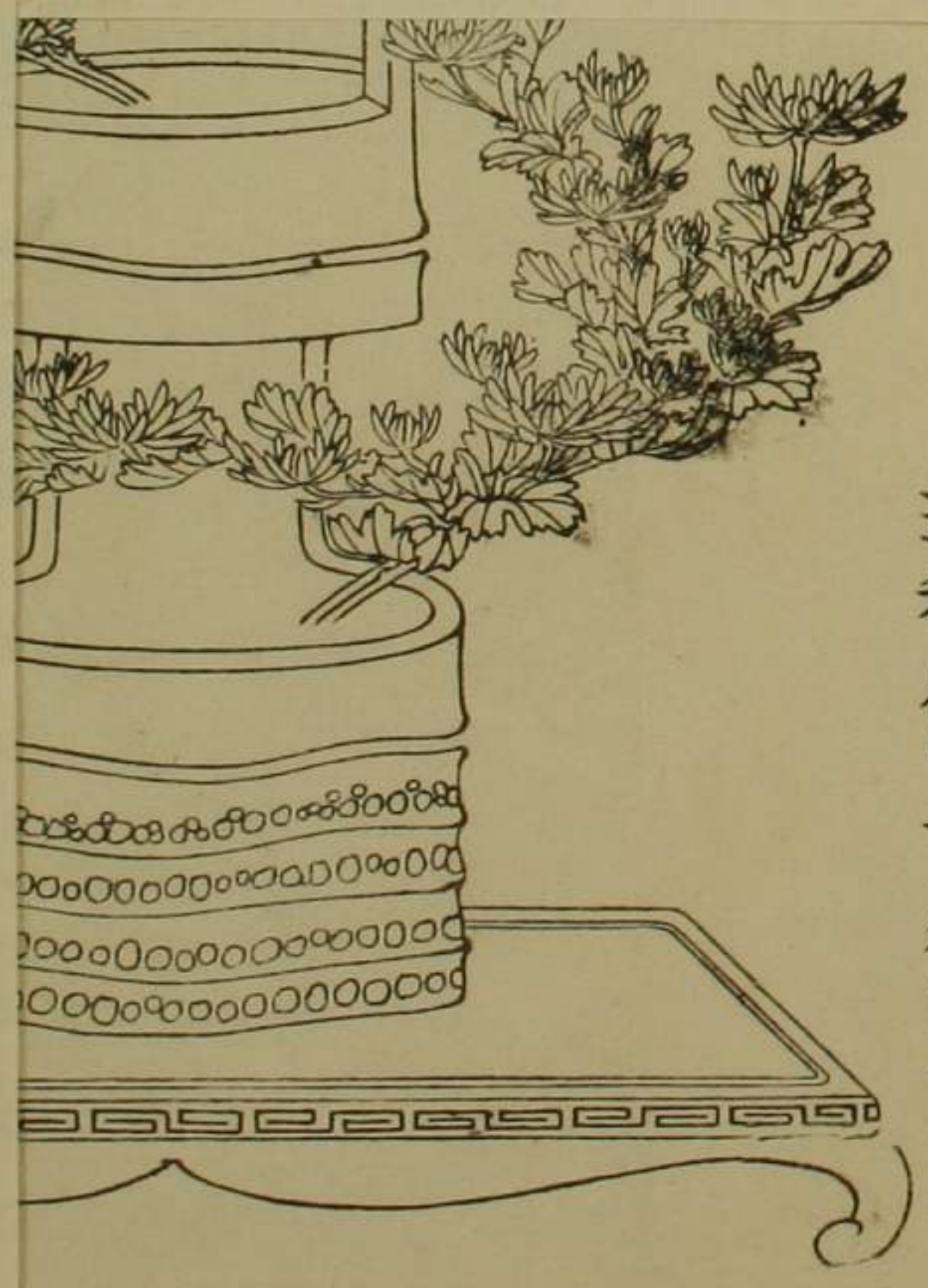
器 江戸 翠松亭所録

成化時香澤水

六水

淡如  
觀美  
飲

山城園准御會頭  
美松亭勁節  
通稱佐竹善兵衛源義忠



山園准御會頭

美松亭

中山大納言忠能卿

騷人足奇思  
香草此君子  
况復霜下傑  
清芬絕門苞  
氣稟金行秀  
德備黃中美  
古來鶴髮翁  
養英飲其水  
古老泉作應  
搜書之

忠能

山城園准御會頭  
美松亭勁節  
通稱佐竹善兵衛源義忠



嘉永五年壬子初冬插於  
園御殿奥御座之間

菊七種  
小野川 寒菊 黃菊 白菊 紫菊 紅菊 綠菊

竹器銀 四方乃山里



萍蓬草 十一葉  
三花



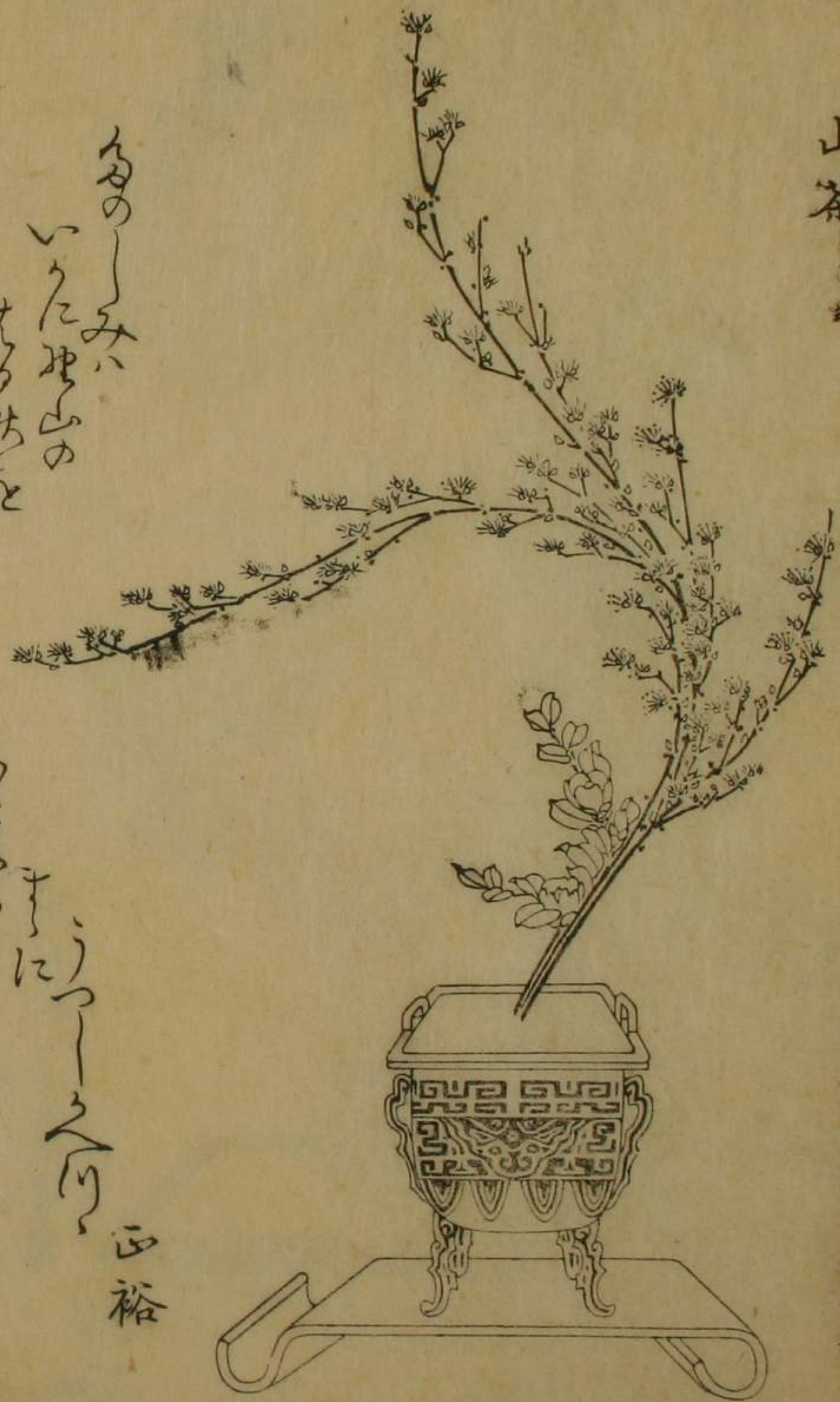
壽鳳齋清雅  
通稱 服部辨次郎

ゆきゆきよるひよも  
あふあふゆゆひの  
とるひよるひよふ  
ほろせ今もこれ  
完和

山菜萸  
山茶 赤花

器亀軒堂鑄

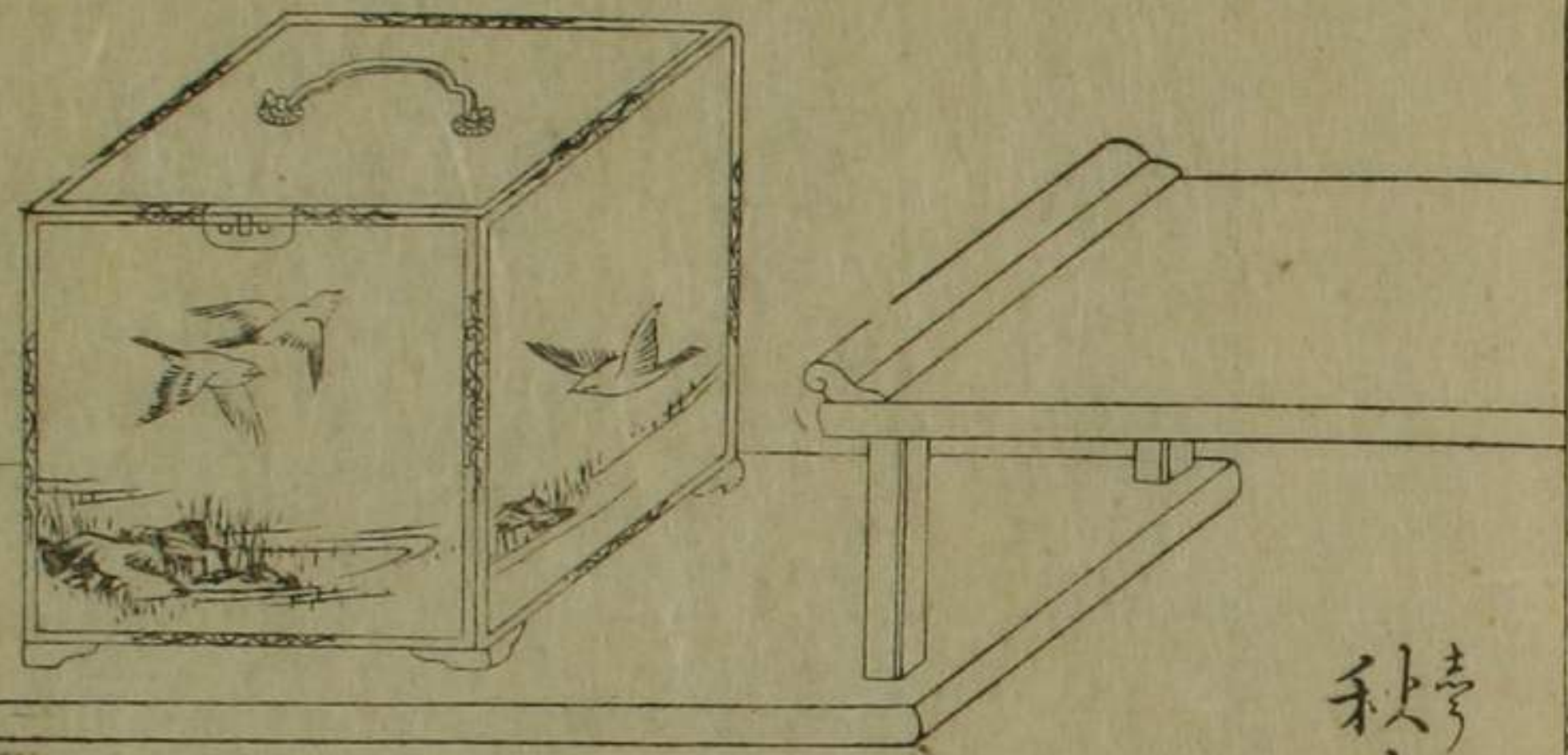
多のしよひ  
いんじゆ山の  
たろ枝を



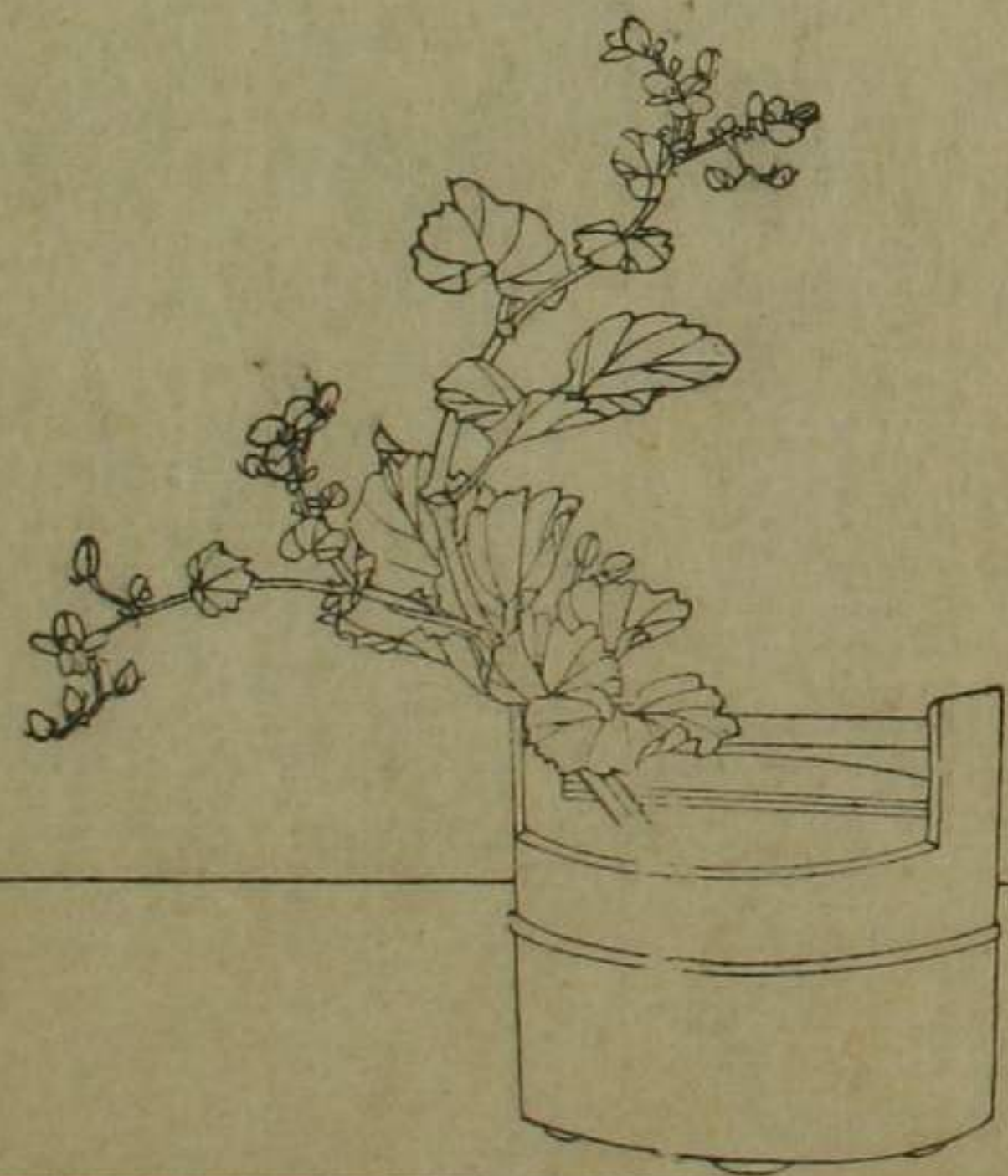
たろ枝を  
すに  
正裕

紫溟軒紅霞  
通稱 別所直次郎藤原高裕

砂算笥



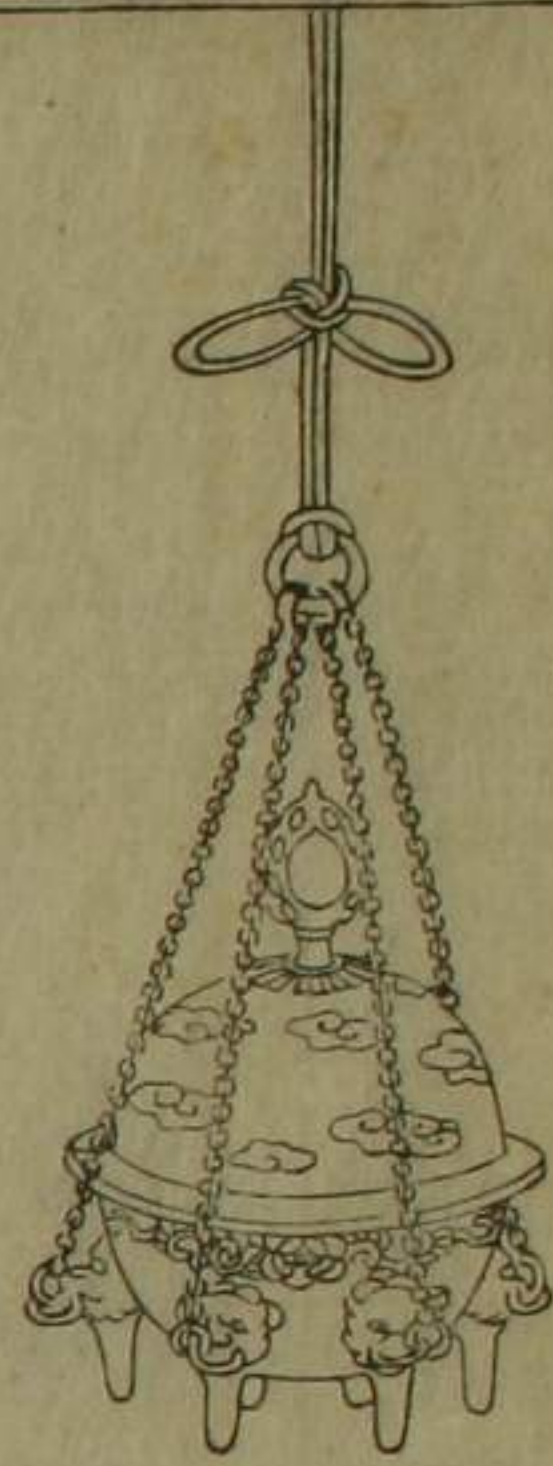
秋海棠



淡月軒梅雪  
通稱 西田源助

東舉寫圃圖

千種侍從有文朝臣



雲の智恵も  
おきろ指合も  
志の波 有文

宝石 中院末旨通躬公御銘

上玄圃石



貴人盆

打雜浪

錦章亭逸雅



山櫻 やまざくら  
松 まつ

器龍文堂鑄

泰松軒和曉

通稱 兼原主馬 源泰高

万年守 謹

常盤木何ぞ何とぞと相まじりて總侍をよりけし  
 花の木敷おほのりと様の方けりや阿ら  
 松をよおる中よいらき之のく標を  
 考つきも終りよひん様を喜記と申す  
 してくさつゆよの冠塔のたらしむるを  
 されしやういひの冠塔のたらしむるを  
 ちりやういひの冠塔のたらしむるを  
 えくあらゆ六世の松のたらしむるを  
 とあついはれ花瓶の素原のたらしむるを  
 けくあらゆ六世の松のたらしむるを

長澤仲隆

燕子花つづき 三奉



隣松軒友石  
通稱 梶山勝左衛門

なまこころ海の

うらやまふらん

つらふとみふと

まきしるり

忠志

川はあつち

よきひそかの

仙人の子代り

むきよ

東久の

敬志

北菊きたきく 小の川四十一編



壽鶴軒松翠

通稱 石田赤七

水鏡  
花五季  
江都  
波重堂作



大和國奈良  
壽仙齋方雅  
通稱 齊藤利兵衛定方

三條西參議左中將季知卿

此花は富山に生るる花也  
大和國奈良に生るる花也

青柳  
梅花  
普微

竹器銘洞鼎

花  
梅  
花  
石



梅章齋和石  
通稱 高木徳左衛門美成

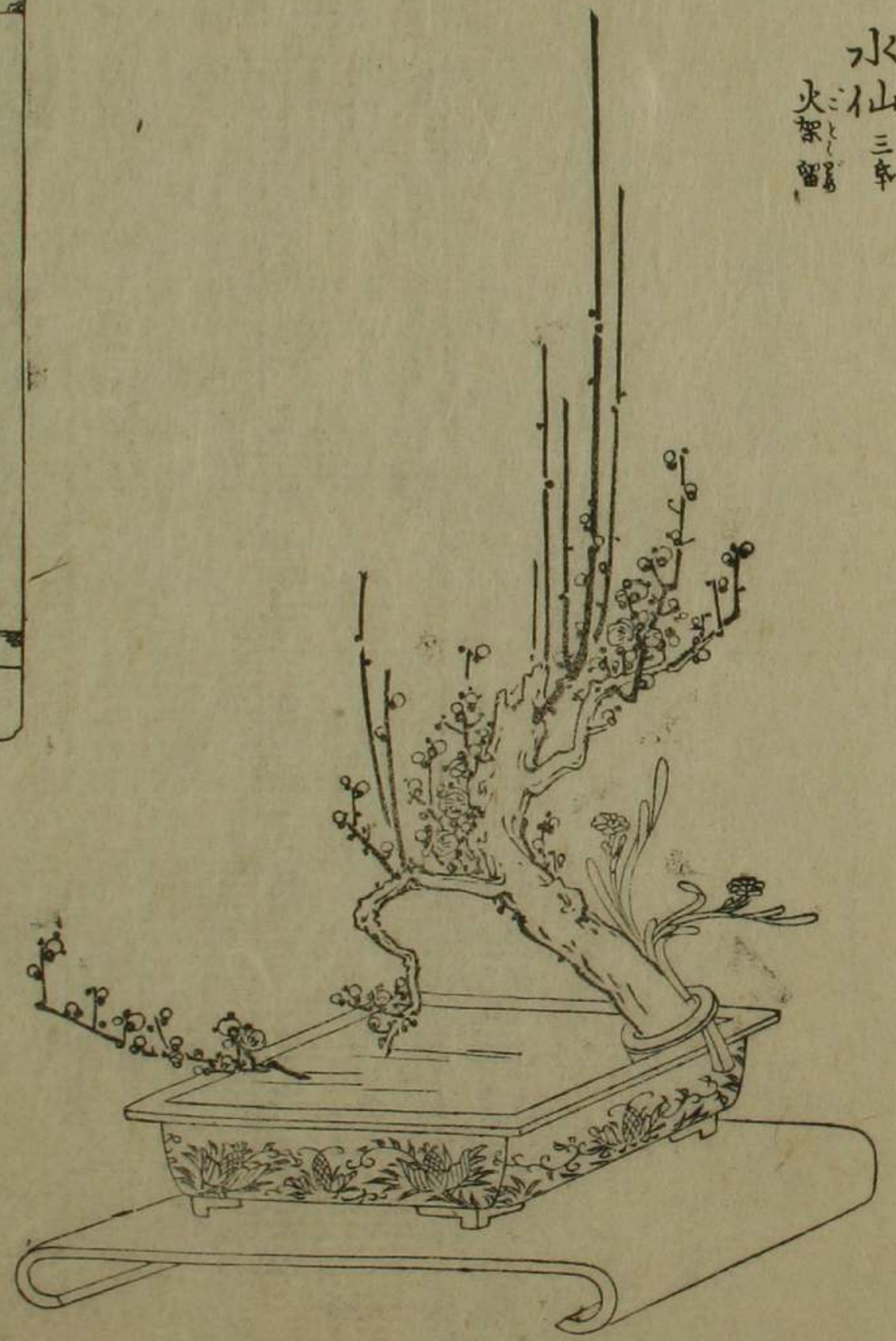
黃冠素服兩嬋妍  
揮向瓶中一好清  
月度外高標誰得  
任回舟李郭是稜  
僊

梅花小仙月瓶圖

宮原龍



梅水仙  
三本  
火架留



活花寺引  
卷之四  
此花之秀  
似如也  
末之松  
松

拂雲齋吟雅  
通稱 益井喜三郎

くさくさ  
あま〜

夏の上草  
あま〜

右胤



若州藩中

掬翠齋冲石

通稱 森川市長三門源俊高

観音蓮 一巻

水仙神骨清絶織如之梁玉清之血茶鮮  
妍石氏之翔眉羊家淨琬史

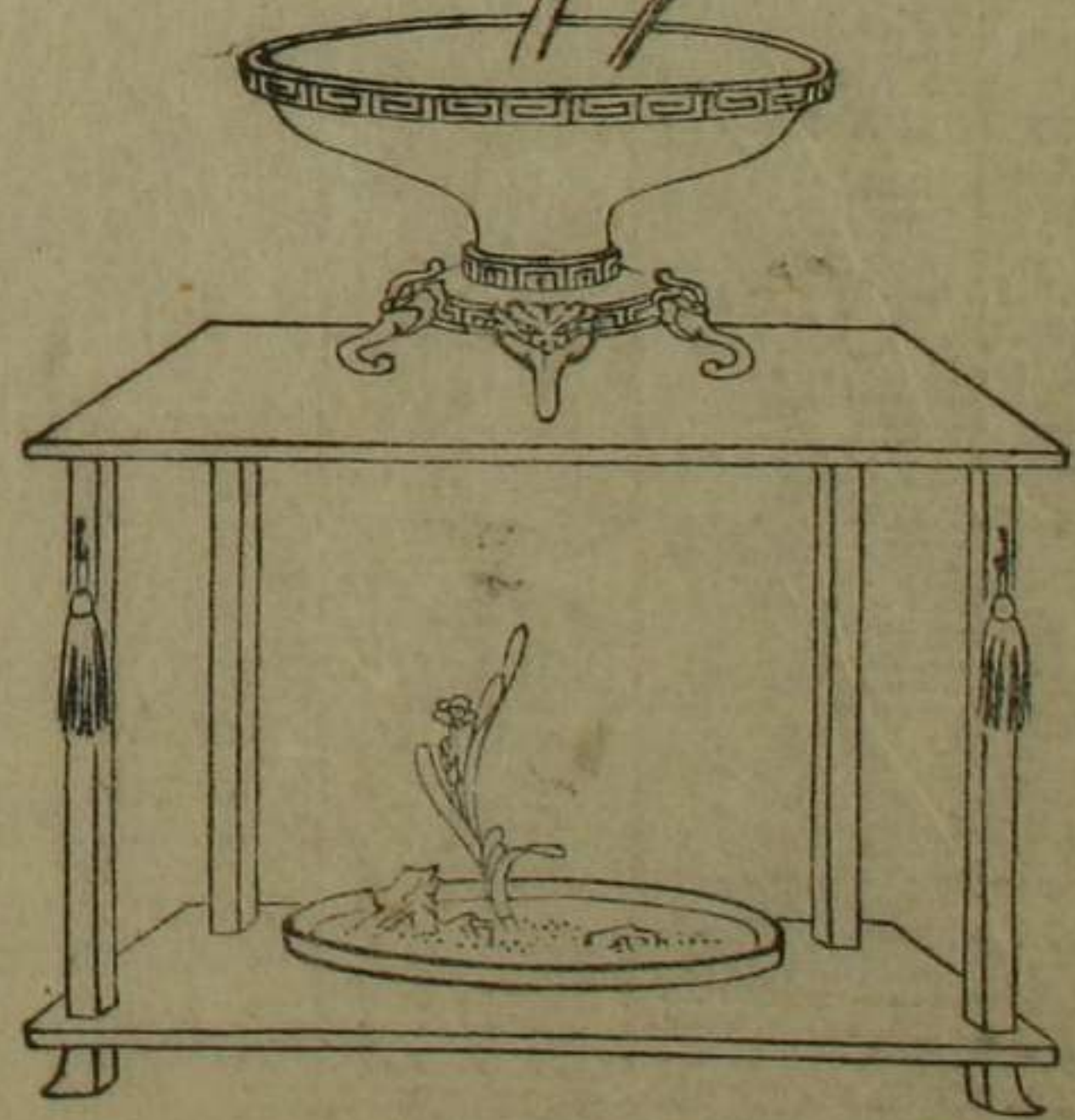
摘瓶史語

明軒書



冠棚  
山茶  
水仙  
紅蓮寺  
小阿弥白  
二事砂留

江都  
渡重齋作



流霞亭梅雅

通稱 片山權兵衛

婆羅山丹



霞谷齋文雅

通稱 田原文次郎

始由のて我々の定んてをいふは、  
 浮城のてをいふは、  
 雙石

滌之起漣漪青  
 帆一葉挂注尔  
 快剪刀截取幽  
 清界

李北詩



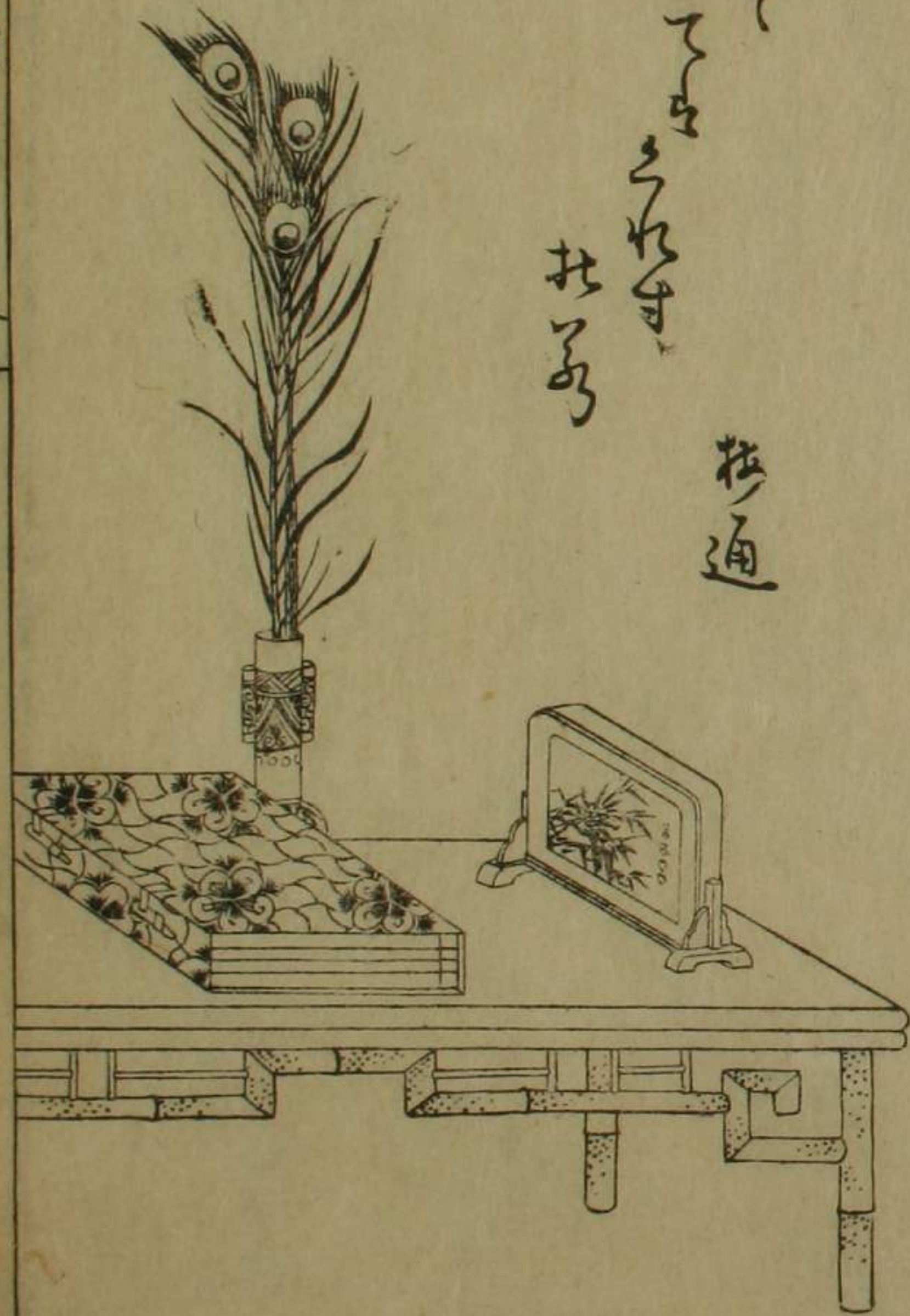
一葉 十九葉  
 嫩芽 四葉  
 二花 三葉

壽樂齋有光

通稱 菊岡新次郎

器龜齡堂鑄





一  
 花下  
 三  
 三  
 三  
 三  
 花通

移来桺柳影斜日在西湖忽見  
 羅帷上淡了水雲鸞星船

檉柳  
きより  
しり  
きり  
 喜留  
 燕子花  
つばき  
 三車

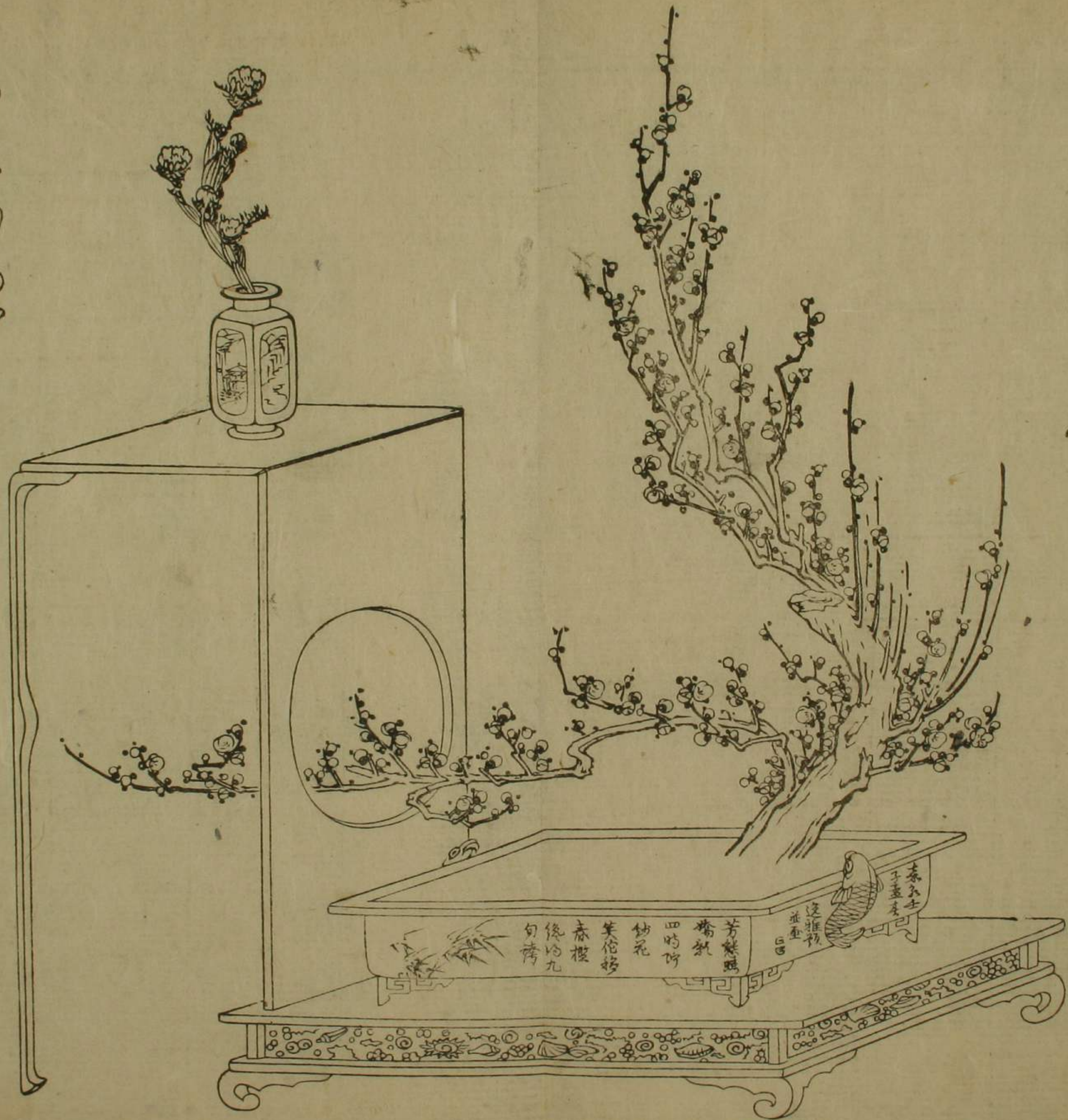


凌雲齋貞桂  
通稱  
原田新助

遠くもわたりては 遠く  
 てもぬのきとら  
 うまはらち枝

挿梅花

松雲軒菊溪  
 通稱 廣田嘉兵衛



あゝ玉乃を  
 老る存物  
 こころの

壽

挿福壽艸

壽谷齋隆雅  
 通稱 海老名謹吾 源秀一

荀香何粉迭隨時諫  
蕊高佞在揮枝少置  
性須如畫苑剔除安  
勿換天姿裁烟前雨露  
方成趣助孤呈紅名穉

宜於淨餅君奪揮訣  
一篇披閱有餘沙

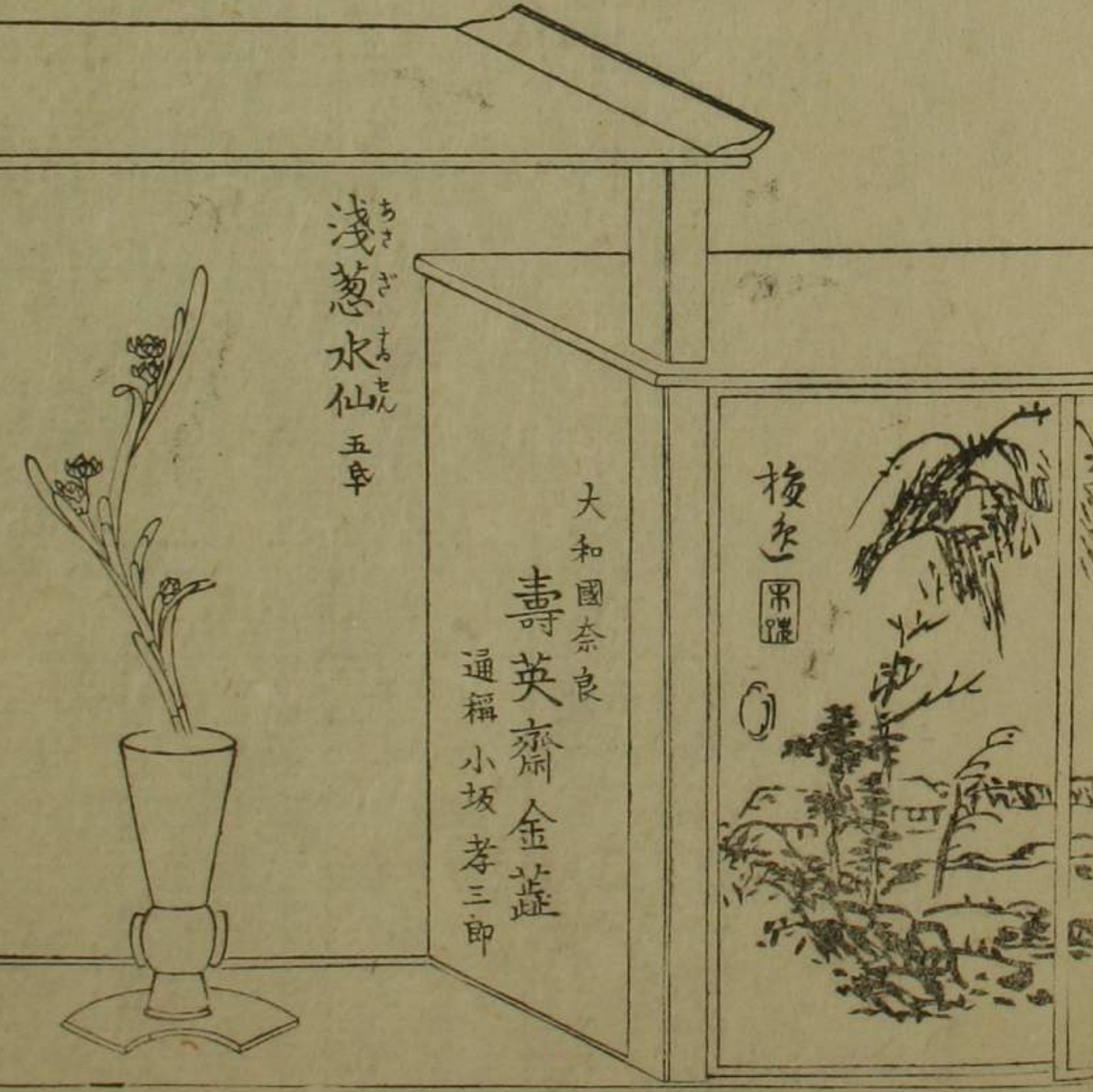
嘉名壬子之米明月

陶所生題



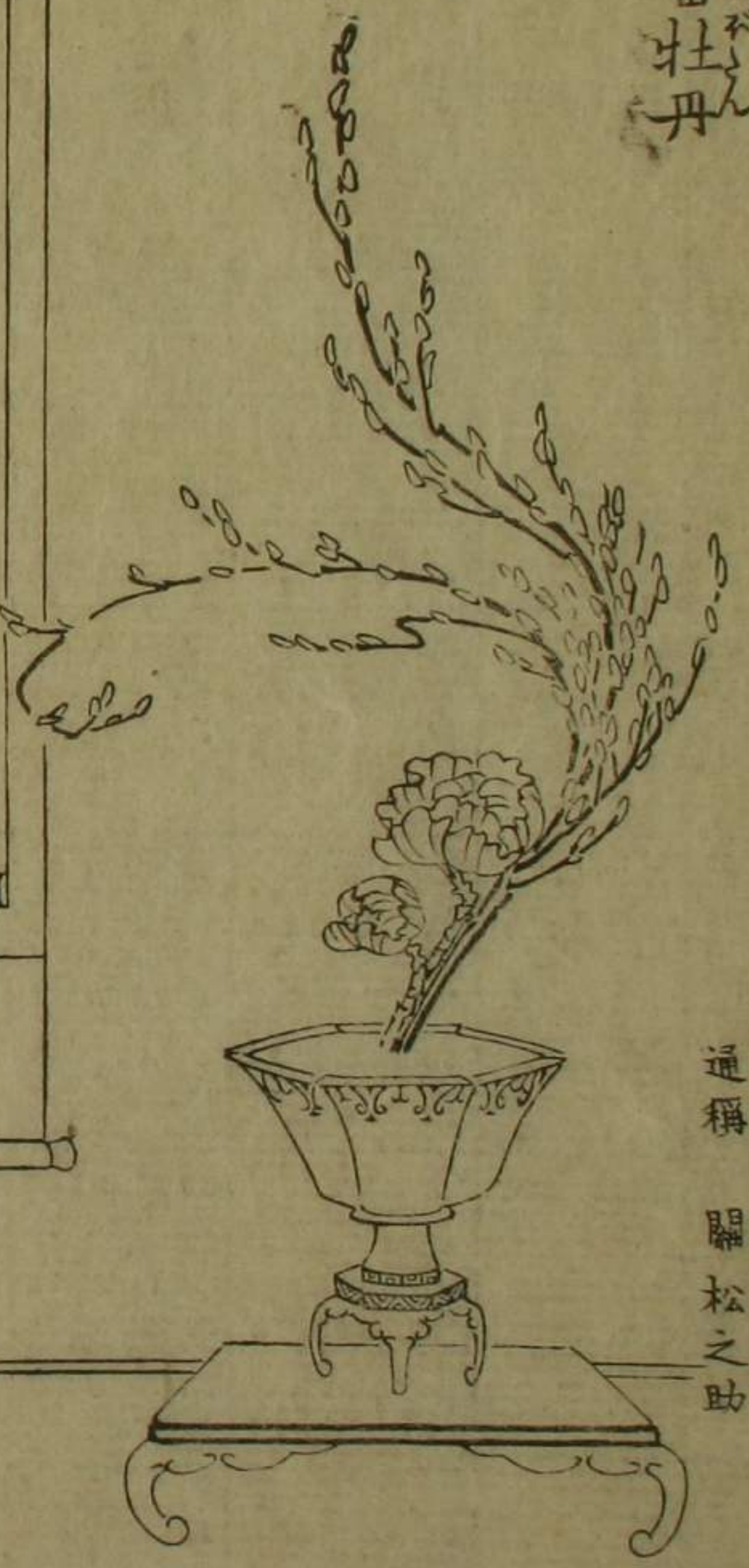
漸歩尋  
 波色澄  
 仙風道  
 骨冷松  
 水者時  
 作賦人  
 何玄素  
 月碧雲  
 情石緣  
 水儂也  
 柳所生爾

○活花手引 卷之四



水揚  
 番牡丹

水揚  
 番牡丹  
 景運



伊豫國松山  
 南松齋鯉居  
 通稱關松之助

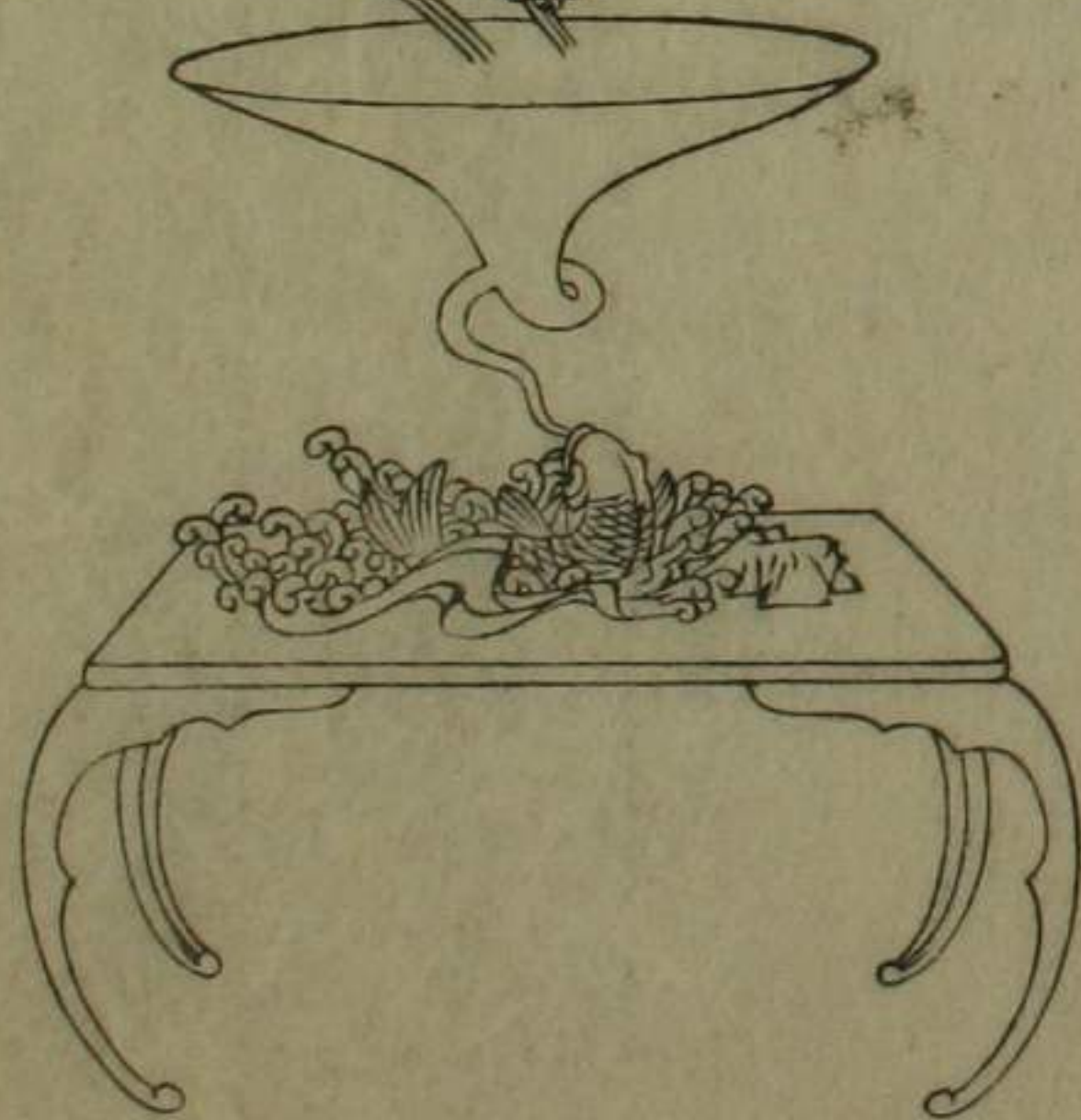


あに  
糺斗菜



一毛齋瀬石

通稱 中野忠八郎



芳柳乃糸

えんえん

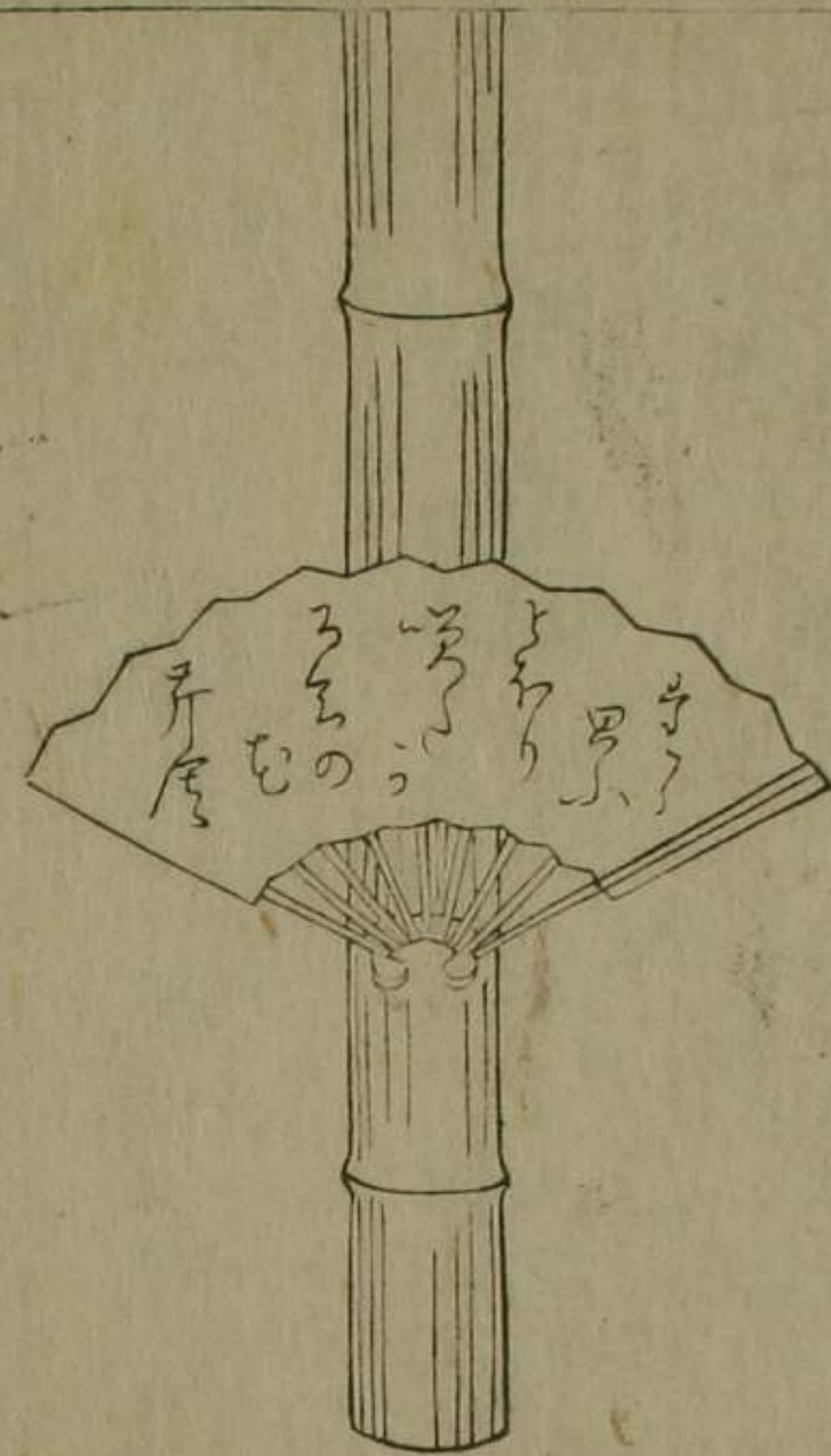
花のうしろ

あまのうしろ

あまのうしろ

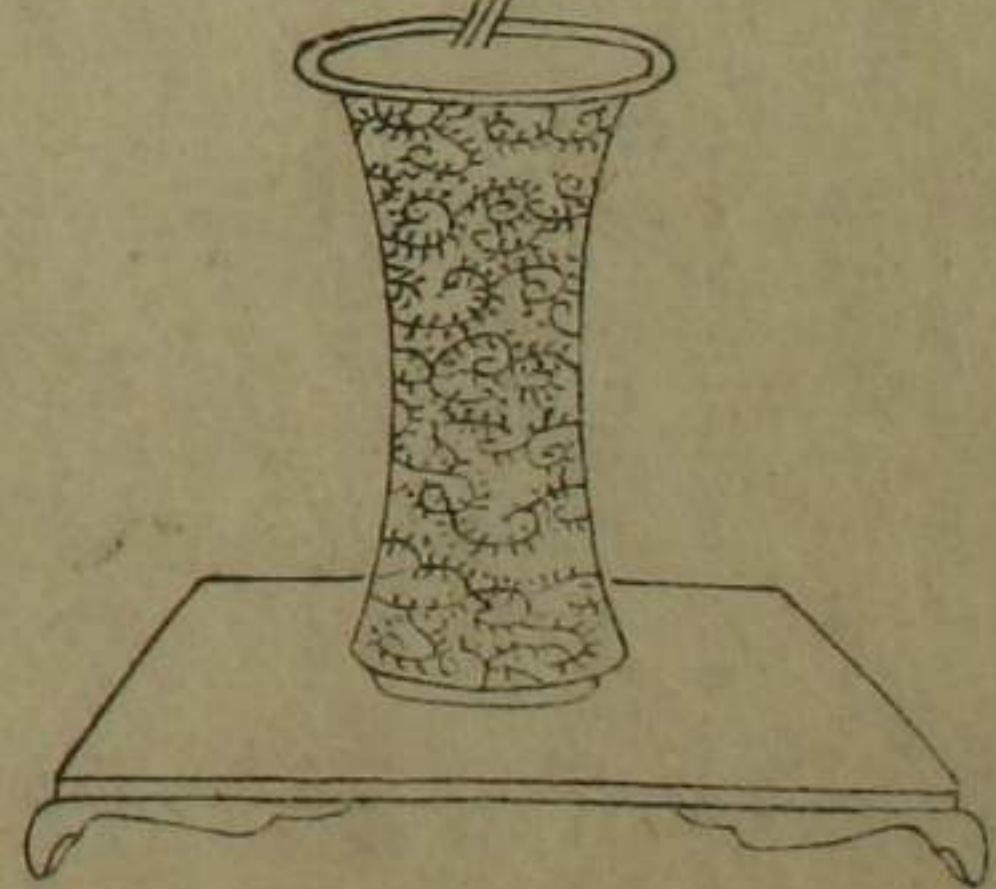
温蔭

百合七花



水月軒柳枝

通稱 橋本利兵衛



蘆草  
萍蓬草

萬碧齋一水  
通稱 小谷早太源一清

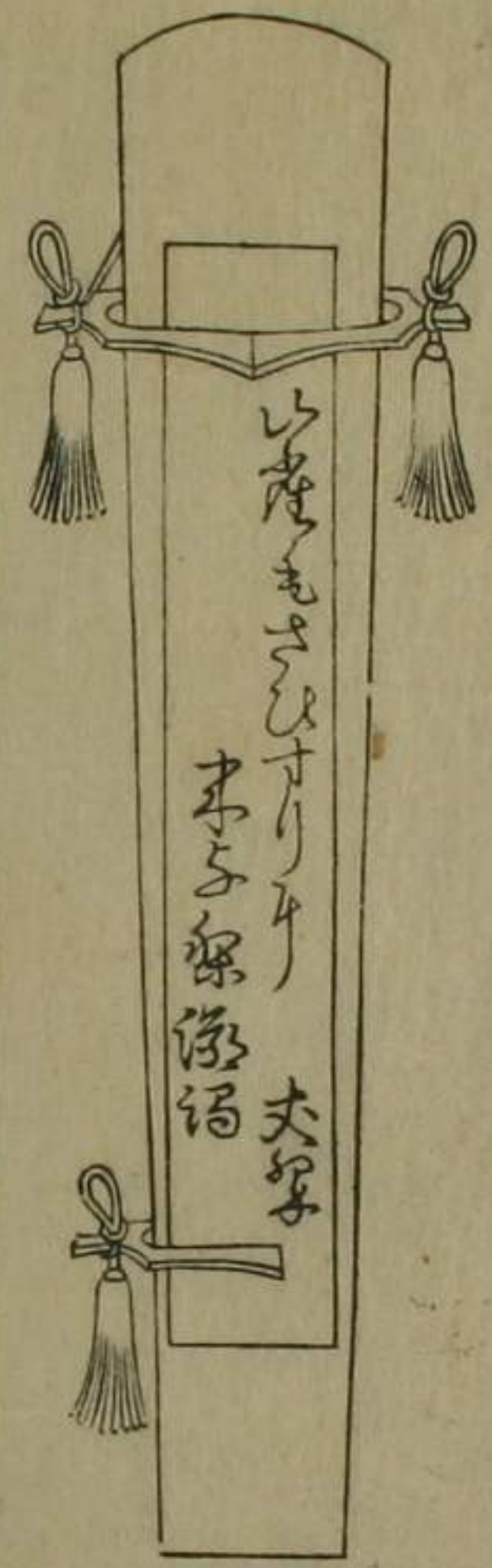
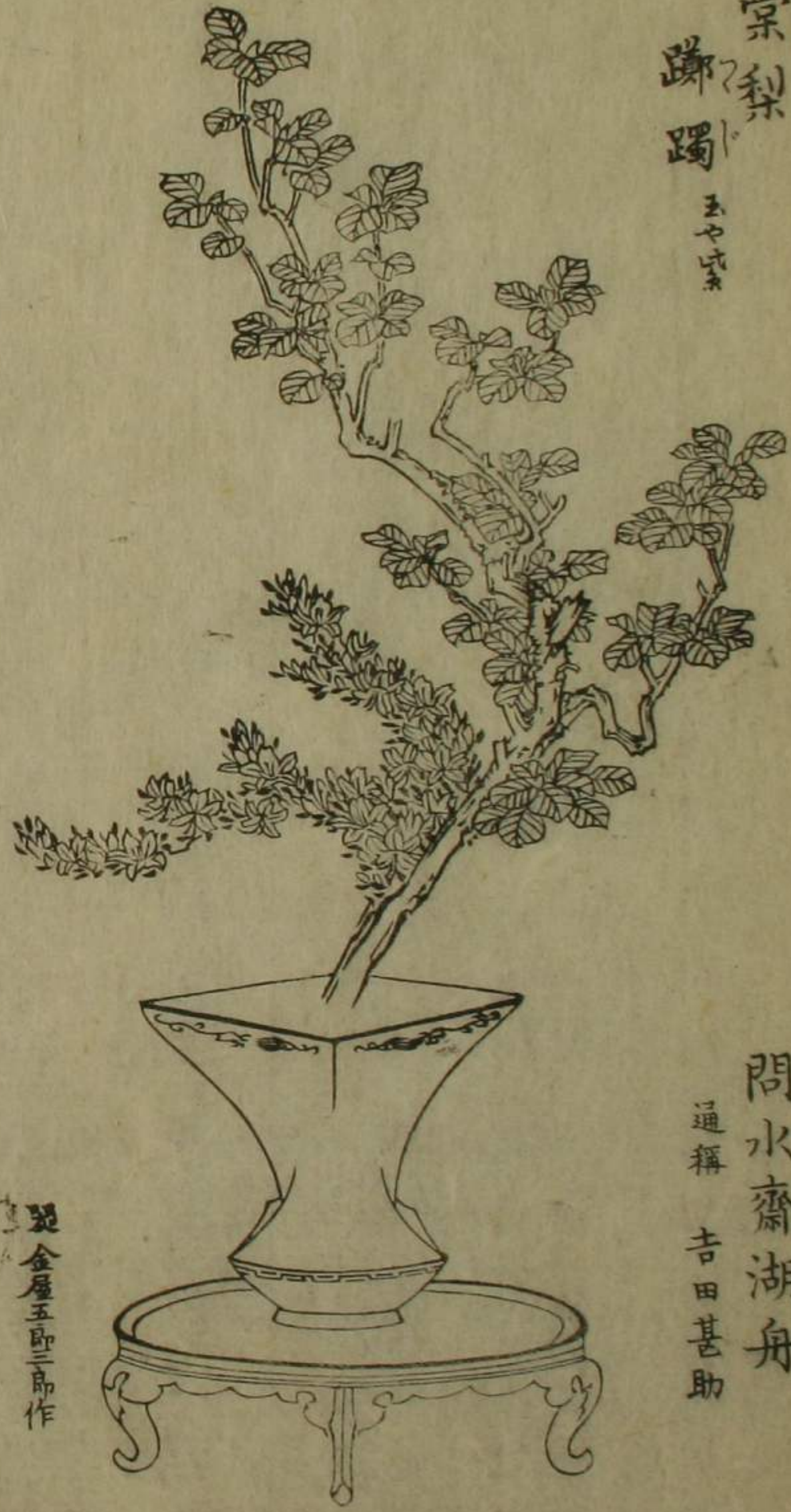


みせよと  
あゝぬのう  
こころかな  
あゝかき  
川貴れ花

縁集

棠梨  
躑躅

問水齋湖舟  
通稱 吉田甚助



山花もさびしかり  
木と深縁福  
大字

鏡金屋玉郎三郎作



棟棠花 ちりしあぶら  
あめくさ  
むくをわらわ  
あめくさ  
いそねをま  
あめくさ

棟棠花 ちりしあぶら  
車留  
組方五川

鏡鑲挿鏡草  
上巻棟棠英  
玉水憶遺詠  
寫来傳馬情  
長門山根温知



來青齋藍水  
通稱 服部算人

一葉十三葉



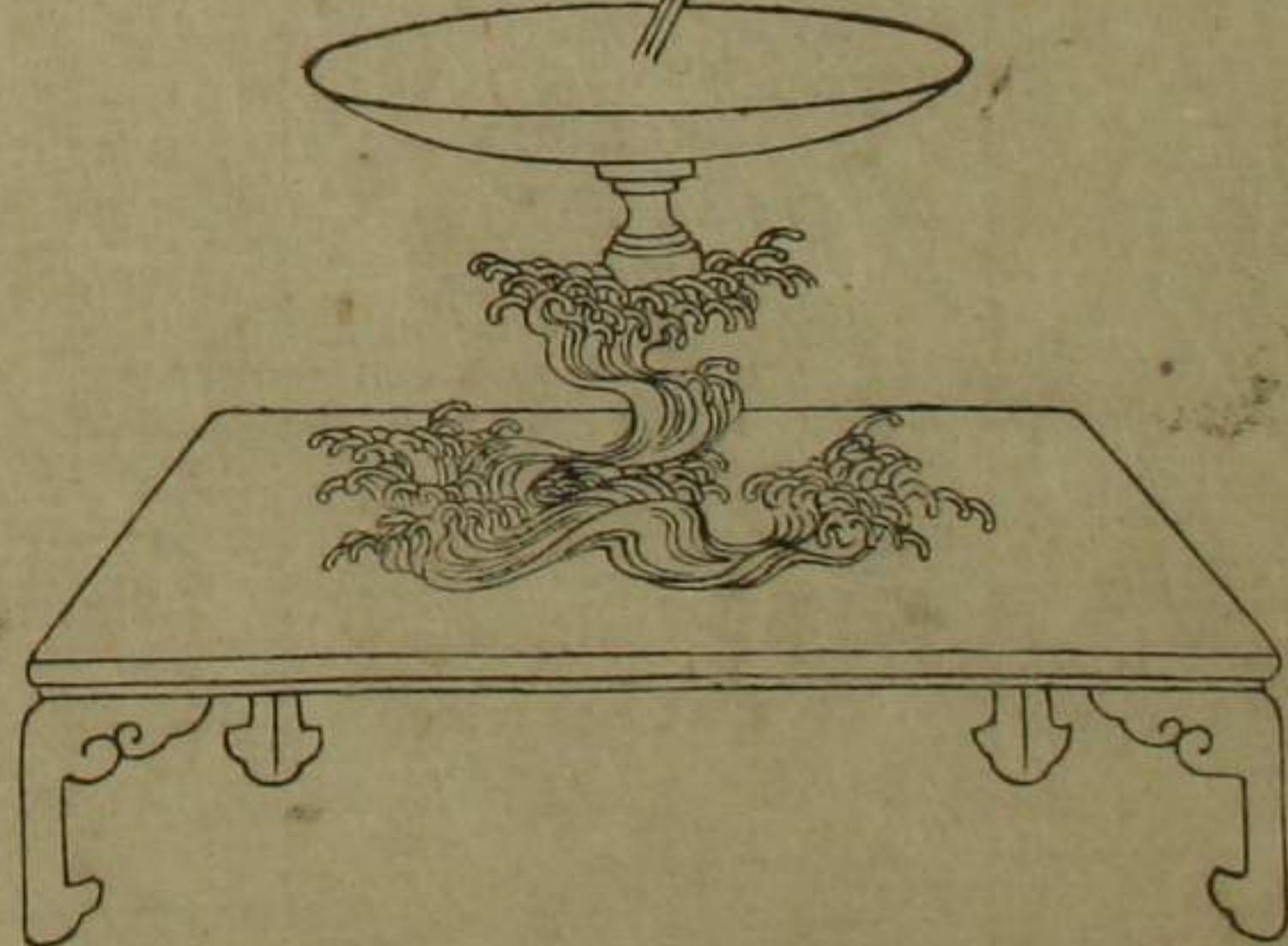
さくさくは度紫  
さくさくはみくまは  
湯のさくさく

おのれは  
忠秋

丹後國岩瀧

翠松齋林南

通稱 千賀五三郎



香山画



鳳尾竹  
黒松  
梅

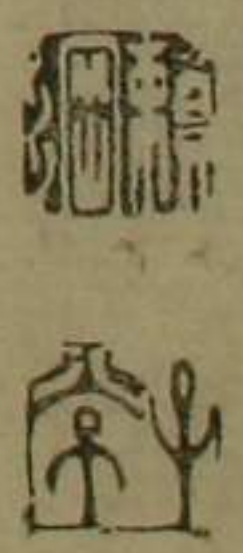


大和國奈良  
壽養齋閑雅  
通稱 藤木条三郎



三友驕 肩勢不孤更看  
 龜鶴上 銅盃雲煙恰挂飛  
 樓影併 已蓬萊仙閣圖

五齋賴綱



皇國活華赫隆考

今皇國之盛りく行りく活華の伎の世に發起を起る熟  
 考より遠く神代に伊邪那美命の靈を祭るに花を用齋祭る  
 古典の上は昭々としてその齋を祭りつる處を花窟といふ  
 増基法師が紀行を記し今も紀伊國熊野郷に其名存る  
 聞へりて三枝祭りと三枝花飾酒樽祭りと事令此御典なり  
 又云は太古より木草の花を以て神を祭り靈を鎮和せ奉る夏は  
 皇大御國の古式なりといふを更なりされども當時其花を奉る  
 状をいふ有る人今より推量し知るべきものほきとも本末其花  
 字奉る其神の御心は賞祭り少なき料なるが卷の中は美禰

選をばり美禰に花の中にも其枝葉の格好を風姿  
 可愛き様採成して獻するに違ひ有るを如斯花を  
 選に風姿採成しはる則活華の伎の起りつる濫觴に有る  
 皇國ハ萬事ありしを細少なる伎に委曲  
 傳へられ國風を古書にも瓶に花をさし車にもえ  
 て規則を正せし状杯ハ漏る傳へるを吾園の御家より古より  
 後花園天皇の御宇にわたりてやんて茶をよゆ  
 中納言基秀卿と白セがなほも嚴重に花則を定え  
 玉ひりて有るを尋常の説ふ此頃彼相阿弥が草本非れ  
 茶法を轉じて今の茶道を開き初つるを其茶道の常

いけ花を用ひしより茶道は牽引れ義政公の物好は化せしむ  
 此時より権輿つりり如くいひをまつりて其れ既に北畠  
 玄惠法印が喫茶往来卓懸金欄置胡銅之花磁机敷錦繡立  
 罇石之香匙火箸蟬娟兮磁外之花飛疑於吳山千葉之粧芥郁  
 兮爐中之香誤於海岸三錄之煙とんえこれ如く古より花字  
 瓶さして説ひつる事といひも更して彼義政公の時も書院の  
 御飾は挿花を用ひしより事奉臺觀左右御飾記るええこれ  
 如くこれが當時よりいひしこと花器花臺杯の設の有る事ハ著明  
 知れり然るを以て伎の監觴を諸家諸流に傳へる趣區々して  
 或ハ印土の釋迦文佛が拈華微笑起るといひ或ハ阿羅漢阿難の事

發るといひしより赤縣の表仲郎が瓶史張謙徳が瓶花譜陳湜子が  
 花鏡やど瓶花の事字記せざるを是と権輿しりて論つれ  
 如く其流其流よりて尚さめくもいひしこと如く其れ  
 一定ざるを皆其流祖の己れにささるる推量り定めしむ  
 説かれざるべしそむく如此印土赤縣も花の推量る事どもハ  
 あれど唯佛の供物とておのき一己の愛翫の爲のこゝろ皇國  
 への高貴尊重なりと云も更なり士庶乃上り流りて其時  
 ふれ節々當りて常は此伎を用ひて活花を愛翫するなりハセと  
 成つる元來草木の花の萬國に勝るて立派な美廉さ故なれば  
 彼赤縣印土よりいひし類ふあらばは其草木のこゝろの殊に

美廉ウレハシより由縁イハレ々々神代イの五十猛神イタシの天上アノより木種コノキを子サハ持下りて給  
 了ア字諸審國ウエより殖給ウエを命コトとて特コトに皇國ウエに殖置給へり  
 其木種コノキより生出つる樹ツキどもれ萬國マンクニに勝スりて喬木タカキと云ふつるを  
 彼景行紀カミヤマトなる筑后國ツクノキ乃歴木風土記コノキなる近江國オホナの栗樹クリを始め  
 古事記コトワザより見えたる和泉國ニギハヤヒ乃大木伊豫國イセ乃桂木カキなどいふと多し  
 聞キえ殊ニ木花コノハナ之佐久夜毘賣命サクヤヒメノミコトと云ふ乃御名ミナを櫻サクラ大乃自神オホナ  
 と云イハ白シロくくも云イハ櫻樹サクラの靈ミタマと云ふを今尚華ハナと云ふは此花コノハナ  
 限セるゆへにすべからず花ハナと此神コノカミこそ知チりしゆえに成生ナリマおる  
 又木キ々々扶桑サクラの大樹オホキの生出ナリマる地チなるゆへ皇國オホナ乃總稱オホナ字赤縣モロコシ  
 々々扶桑サクラと唱ナへ其華ハナ乃可愛コトナキを稱ホソ誉ソて東華トウワ青華アヲハナと云イハ榮ハヤせ

一々ヒトヒトむを云イハるは扶桑樹サクラと預イねる事コトなりと云ふ平田翁ヘイデンが考記コウキより云  
 せりゆきばかり花祖ハナノミヤと云ふ神カミの生ナませる國クニと云ふは他國ヒトクニと云ふは  
 華ハナをりて稱イハふ皇國オホナと云ふは今活花イハナの伎ワザ乃真盛マサカの榮ハヤりたる  
 ことなり天アマつ神カミの御量ミハカリより久々クク能智ノチ野推ノチ乃神等カミナリの山野ヤマノ  
 乃花ハナを特別モトメて幸チカひ給へる神事カミコトなりと云ふ思オモひありて  
 園ニ御家ミヤ乃活華イハナ乃道ミチと云ふは古コくは世ヨに華ハナ々々御家流ミヤノリウと唱イハへ  
 来キりて此伎コノワザの生ナるハヤハカ分ワカレる數カズ々のなぐれと云ふは  
 其源ミナモト乃青山アヲヤマと云ふ號ナを冠カらせり呼コ別トつるは  
 天照皇大御神アマテラニニスオホミカミの高天原タカマハラ乃御座時須佐之男命オホシメノトキスサノヲノミコト乃種々タガヤ荒アラ惡アク行ユク事コト  
 なるを給イひりて青山アヲヤマをからしめり給へる事コトの有アらる

後アラム子ミその荒魂アラム神ミ坐マセる五十イ猛神タカシの前サキより木キの種タネとて  
多サハ持テ下カり皇國ミコクの殖生ウエオし給タマへる功積ミイサを以もつて勝カつ木キ々の立  
榮サカえ青山アヲのを以もつてわくわく深コソき理コトワりて

靈元レイゲン天皇テウの御宇ミウに 大納言ダイナクワン基香キカウ卿キョウと白シラちが青山アヲ社ヤを齋イツキ祭マツリ

給タマへり唱ナカへまつる尚ナカ此コトの事コトも委ウカし

辨ワキマへり事コトどももあはれ

く吾ワガ汲流シツリウの車クルマを引ヒき思オモひ人ヒトも有アらば漏モラ

く阿波アハ礼レイ古コも例タヒナ稀ヒなる昇平シヤウヘイと御世ミヨに生ナれ合アはる

風雅フウヤ事コトを常トコに翫カシぶ事コトの歡ウレシ喜ヨロコしきも益トク

今イマ往末ユクスエと此コノ伎ヒナの世ヨに榮サカえ行ユクぬ處トコロは朝日アサヒの艶ニホふ

花櫻ハナウツギのごとく彼カノ漢人カンジン乃ハ言立コトタテし木德キトク仁風ニフウと慕ヒひ

其ソノ風雅フウヤ事コト字仰アツがどや珍メ重シげめや也

草クサも木キも苔コケむけ巖イハと那ナりぬる榮行サカユクは花ハナの道ミチ

嘉永六年

錦章亭水谷有正

志シるす

跋  
十纂

良家小姐雖五官端正吐屬  
清雅固非天僊化人一見消  
魂褫魄者也夫花亦然其在  
圃畦未經矯揉者雖端正清  
雅如良家小姐奈有些呆氣  
一經矯揉而插瓶盞則態度

絕塵如天仙化人洵足以消魂  
褫魄矣此插花技之所以不可  
已也壽松園主人插花者流  
之巨擘也屬者著活花圖說  
其極法變幻位置工麗秀色  
可餐余評之曰滿冊會評多  
天仙化人若有人嫌其戕賊花

亦以為媚態則是避毛嬙驪  
姬之魚鳥麋鹿百亦末  
如之何

嘉永癸丑桂月萬水學人駒

撰并書



